

上高井文学同好会

お薦めの本の紹介

- | | | | | |
|----|---------------|------------------|--------------|-------|
| 1 | 笹の船で海を渡る | 角田光代 | 栗ガ丘小 | 宮坂ゆかり |
| 2 | すべての神様の十月 | 小路幸也 | 栗ガ丘小 | 清水幸子 |
| 3 | 舟を編む | 三浦しをん | 栗ガ丘小 | 林せつり |
| 4 | 感覚の幽い風景 | 鷺田清一 | 小布施中 | 竹内正 |
| 5 | 孤高の人 | 新田次郎 | 豊丘小 | 水澤良光 |
| 6 | かもめのジョナサン 完成版 | リチャード・バック著 | 五木寛之創訳
東中 | 梅本京子 |
| 7 | 昨夜のカレー、明日のパン | 木皿泉 | 東中 | 齊藤正一 |
| 8 | ヒップの極意 | ドナルド・フェイゲン著 | 奥田祐士
仁礼小 | 西原秀明 |
| 9 | はるか遠く、彼方の君へ | 安澄加奈 | 森上小 | 塚田久美子 |
| 10 | 和語愛語を生きる | 半田孝順 北沢房子 (聞き書き) | 森上小 | 堀川博光 |

文学同好会 本の紹介

紹介者 栗ガ丘小学校 宮坂 ゆかり

1.

○紹介する本 『笹の船で海を渡る』

○著者 角田 光代 (かくた みつよ)。早稲田大学第一文学部卒業。

1990年、「幸福な遊戯」で海燕新人文学賞を受賞し、小説家としてデビュー。

1996年に『まどろむ夜のUFO』で野間文芸新人賞のほか、2005年には、『対岸の彼女』

で第132回直木三十五賞、2007年『八日目の蝉』で中央公論文芸賞を受賞している。

○出版社 毎日新聞社

○本書によせて

角田光代は、今勢いのある作家の1人だろう。映像化されている作品も多く、ミステリーを指してはいないのに、人生はミステリーとばかりにミステリアスな作品も多い。本作は、全体としては今までの角田さんらしくない作品で、レビューを読んでも辛口の感想が多くなっている。が、読了した時の寂寞とした感じや母娘の確執が話の軸であることは、変わりなかった。角田さんの作品において「女同士の確執」「母娘の確執」は繰り返し描かれるテーマでもある。(と思う。)

題名の意図するところは、「人生は笹の船で海を渡るようなもの」か。寄る辺もなく、權もなく、翻弄されながらも、しかししぶとく生きている、生きていかねばならない。最後にある種の「希望」を感じもした。

2.



『すべての神様の十月』^{しょうじゆまや} 小路幸也

PHP研究所

「東京バンドワゴン」シリーズで有名な小路幸也さんの作品で、死神、貧乏神、九十九神などの神様と人間との関わりがほっこりとした読後感を与えてくれる短編集です。死神は伊坂幸太郎さんの「死神の精度」「死神の浮力」（これらの本も素晴らしい！）に出てくる死神の千葉ちゃんに似ていて、私のそばに来てほしいと思うくらい魅力的です。

福の神さんはそんなふう人間を助けてくれていたのね。と、これまたお会いしたくなる存在でした。

「生きる力を持つ。人間はそういう生き物。それを、ほんの少し手助けするために」神様がいます。この日本には・・・本当にそうかも。と読んで元気が出る本です。一度は消えた死神が最後にまた登場し、きっとシリーズ化されるのでは。と思いました。いや、ぜひ続きを書いてほしいと思う本です。読み終わった後、あたたかい思いに満たされること請け合いです。ぜひ手に取ってみてください。(栗ガ丘小学校 清水幸子)

3.

「舟を編む」三浦しをん

2012年、本屋大賞を受賞。2013年には、映画化もされた作品である。

「辞書は、言葉の海を渡る舟だ。」

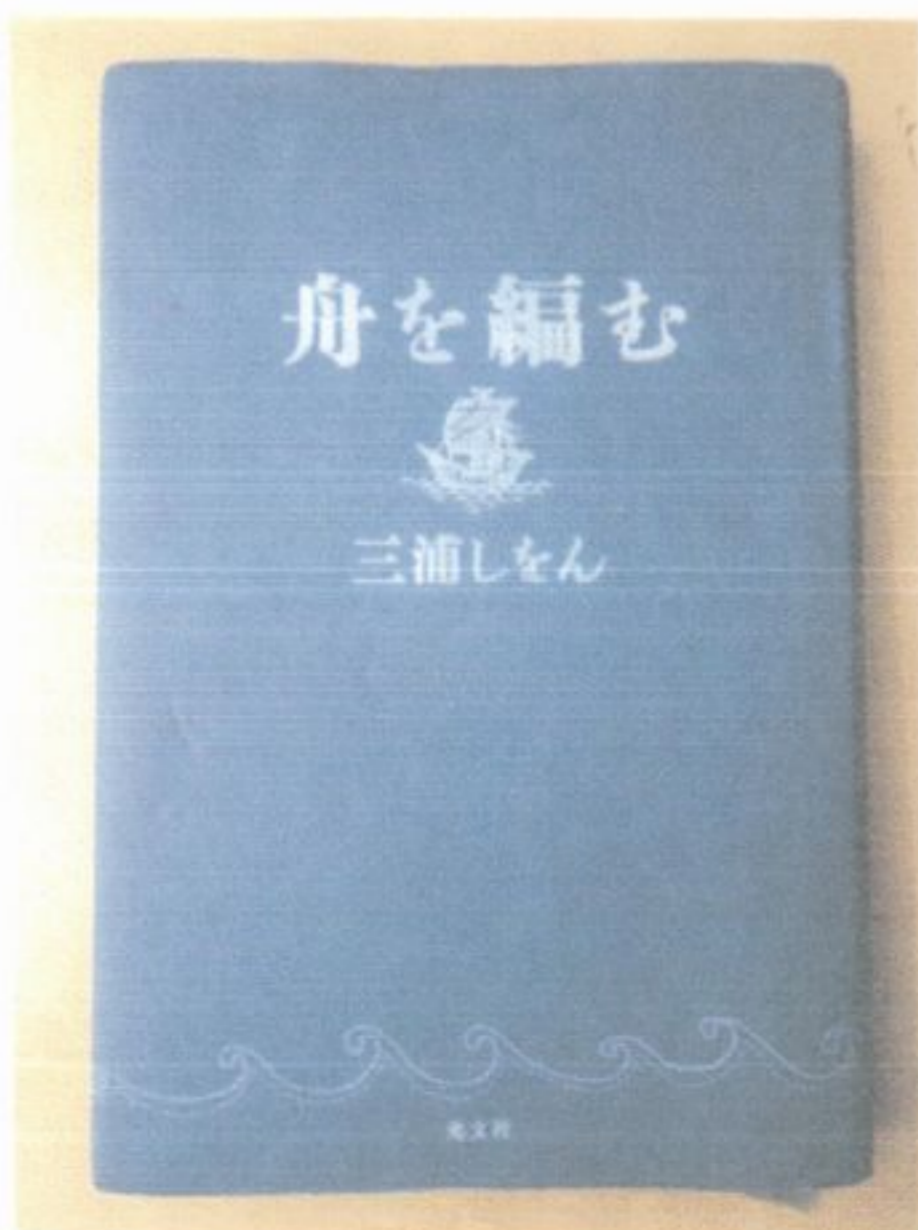
もっともふさわしい言葉で、正確に・・・辞書という舟を編んでいく人たちの物語。

出版社に勤めるちょっと変わった編集部員「馬締光也(まじめ みつや)」が、新しく刊行する辞書『大渡海』の編纂メンバーとなり、辞書作りの世界に没頭していく姿を描いた作品である。

言葉の意味を調べるために辞書を開くと、大抵の言葉の意味は辞書に載っている。

辞書を編纂している側のことなど、考えたこともなかったが、意味の説明に矛盾がないか、時代に即しているかなどなど、あらゆることに神経を使い、言葉にしつこいぐらい執着して作っているのだ。辞書の編纂にはたくさんの人々が関わり、長い年月を費やし、来る日も来る日も言葉と向き合い、検討を重ねて作られいく。どの辞書にも負けない新しい辞書を作ろうと地道に奮闘している人たちの熱い気持ちが素敵だった。

〈栗ガ丘小学校 林 せつり〉



4.

『感覚の幽い風景』（鷺田清一、紀伊国屋書店）

いくら考えを変えようとしても気がつけば思考がいつも同じ軌跡を描いている、とあきらめ半分に思い知らされることがあります。ここでぐっとくるな、と思ったとたん、まさにその通りに涙をあふれさせていることもあります。思考にも感覚にも感情にも、なにか知らない枠組みのようなものがあって、それに身を削られながら、それでもそのあまりに類型的なかたちに嫌気がさすこともあります。

その一方で、思いがけず、しかしいつも同じ地点で、感覚が方向を見失ったかのごとくばらけ、やがて散逸してしまうことがないでしょうか。

本書の文章は一部、松商学園の入試問題に取り上げられたことがあります。先日、類題を生徒に解かせたところ、やや難しい文章といった反応がありました。中学3年生にとってはやや理解しにくい内容もありますが、若者にとって感性に訴える内容であると思いあらためて読ませていただきました。

私たち現代人が言葉を通して状況を認識していくうえで、非常に興味深い内容が描かれていると思いました。

小布施中学校

竹内 正

5.

孤高の人

新田次郎

新潮文庫 上下各710円（消費税別）

なぜ山に登るのか・・・ 作者なりの回答がそこに！



信州に住んでいれば、山に登ったことが無くても、この本に出てくる槍ヶ岳などの山の名前は知っているだろう。とにかく信州の山々がいくつも出てくる。登山をしたことのない人でも、まるで自分が実際に山を登っているのではないかと錯覚してしまうような作者の生き生きとした登山描写に、ぐいぐいと引き込まれてしまう事だろう。加藤文太郎という実在の人物を題材に、山とは、仕事とは、人生とは、という大きな問題を別々のものではなく、一つのものとしてとらえようとする作者の野心作である。作者は、仕事についてこう書いている。「それは加藤に限らず、研修所を卒業して、ひととおりの仕事を覚えた若者たちを訪れる一種の倦怠期でもあった。実はこの倦怠期こそ、優秀な設計者

となるべき、研鑽の舞台であり、それに気がつくものは、仕事の中に自ら疑問を発見し、その疑問解決に先輩の知恵を借りて、一段一段と階段を登っていくのであった。」

そして、加藤は登山の体験の中から、ディーゼルエンジン設計上の発見をするのである。高等小学校の学歴で造船技師にまで昇格した加藤文太郎に待っていたのは、吹雪の北鎌尾根での遭難であった。

（須坂市立豊丘小学校 水澤良光）

6. 「かもめのジョナサン 完成版」

リチャード・バック 著

五木寛之 創訳
東中学校 梅本京子



思いがけず我が家の本棚にもう一冊、本を増やすことができるということで、本屋で大いに悩んだ。せつかく買わせていただくのだから、すぐに読まなくなる本でなく、思い出した時に何度も手に取るような本を……。長年親しまれている本がいいかもしれない。そう思った時目にとまったのが、この、「かもめのジョナサン 完成版」である。

元祖(?)「かもめのジョナサン」は、言わずと知れた大ベストセラー。その歴史は古く、なんと、私よりも年上(!!)。まずはアメリカのヒッピーたちの間で大ブームを巻き起こし、満を持して日本に上陸したという。読んでみて、なるほど。精神の自由を説いたジョナサンの生き様は当時のヒッピーたちの理想とする考えに近かったのかもしれない。「ぼくはただかっこよく飛びたい。それだけだ」その考えが両親はじめ群れに受け入れてもらえなかったジョナサン。いわゆる少数派の彼はやがて一人孤独に「かっこよく」飛ぶ練習に励む。やがて恩師と出会い、練習に励む中から徐々に彼の気持ちに変化が生まれる。それは、かつて彼を受け入れなかった古巣の群れへと向かっていく……。

完成版は、元のお話に第4章が追加されたものだ。著者によると、「かもめのジョナサン」が出版された当時に書かれた物だが、ふさわしくないと思い、ずっと存在を伏せていたらしい。私個人的には、これまでの人類が歩んできたことを揶揄するような、そして約40年前に、現在にいたるまでの世の中を予言していたかのような内容であると感じた。

ジョナサンはかもめたちの間で次第に神格化されていき、いわゆる偶像崇拝の対象となっていく。彼の目指すものは廃れていき、やがて彼の精神を理解する者は誰もいなくなってしまったかのように思われた。しかし、そこに一筋の希望が。すっかり墮落したかのように見えたかもめの世界に、しっかり自分の信念を持ち、物事の本質を見極めようとする気骨のある若者が一。世の中捨てたもんじゃない。

もし私がもう少し若かったら(笑)、この若者を目指そうとちょっと奮起したであろう。しかし今の私は、そういう気骨のある若者が、少しずつこの世の中を変えていってくれないかなあ。なんて、他力本願に思ってしまう。

かもめの写真に癒やされながら、一気にググッと読破できる本。いろいろあるけど、うん、何かに向かって、精一杯努力してみるというのもいいかもしれない。そこから新しい世界が見えてくるかも。と前向きにもなれる本だった。新年度が始まる時に、また読みたい本だ。

木皿泉『昨夜のカレー、明日のパン』(河出書房新社 2013)

『昨夜のカレー、明日のパン』は、2014年度本屋大賞で第2位に選ばれた連作短編集。作者は、和泉努と鹿年季子の夫婦の脚本家。2014年秋に、作者自らの脚本で、NHKB Sプレミアムでドラマ化されることになっている。

時系列も主人公も違う連作だが、中心になるのは、若くして夫の一樹を亡くしたテツコと、一樹の父の寺山連太郎(ギフ)。テツコと一樹の結婚生活の何倍もの時間を2人で暮らしている。そのほかにも、魅力的な人物が登場する。

「ムムム」では、テツコが、交際中の岩井からプロポーズされる。しかし、テツコは、家族を作りたくないという理由で受け入れることができない。テツコと岩井は、結婚はしなくても、交際を続けることを選ぶ。

「パワースポット」は、前作の表題になったムムムこと小田タカラが主人公。喜怒哀楽を受け止め、表現することができなかつたタカラが、一樹の死を受け入れることで、中学の同級生たちとの新しい仕事をスタートさせようとする。

「山ガール」は、定年が迫った気象予報士のギフが主人公。ギフは、テツコに紹介された大日如来のような小川里子に教えられ山登りをする。ビールを飲み過ぎて遭難しかけるが、亡き妻夕子のことを思い出して、無事下山する。

「虎尾」は、一樹の従弟の虎尾が主人公。あこがれの従兄のことを忘れてたくない虎尾は、一樹の車をもらい受ける。その車を使い、テツコが隠し持っていた一樹の遺骨を墓に戻しに行くのを手伝い、気持ちの区切りをつける。

「魔法のカード」では、岩井が、いじめに遭っているという小学生の少女にだまされて大金を失う。テツコは、岩井が少女に渡した魔法のカードを自分もほしいとねだる。

「夕子」は、一樹の亡き母が主人公。涙が止まらなくなることで人の死を予知できる夕子が、寺山連太郎と見合いをする。占いの結果は悪かったが、夕子は、死の予知を外した連太郎と結婚し、銀杏の木のある家で連太郎に看取られる。

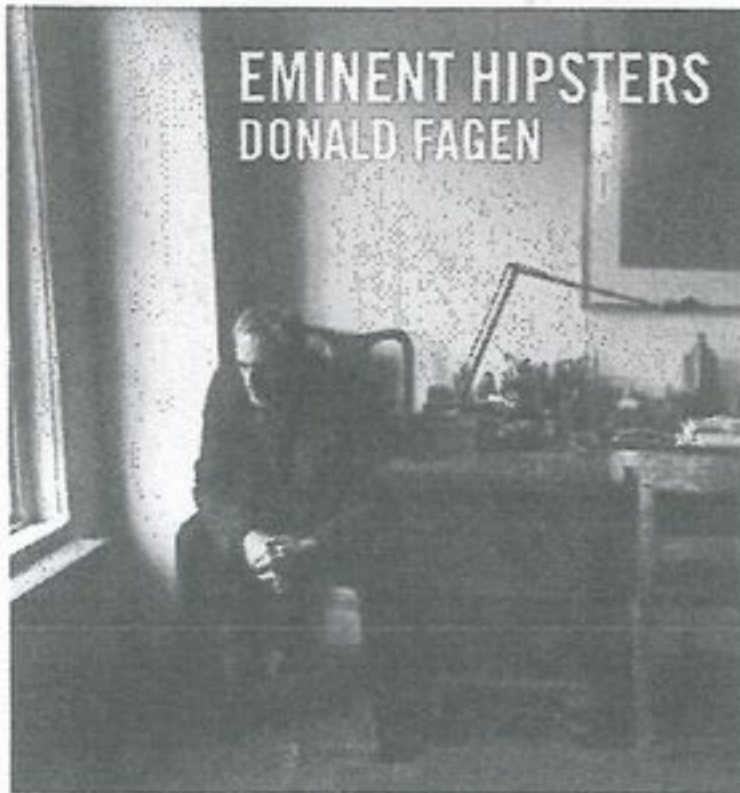
「男子会」は、詐欺にあつて家具と水を買わされたギフが、岩井の家に家出をする話。家出をきっかけに、岩井はテツコとギフの家に泊まり、食事を取るようになる。

「一樹」は、子どものころの一樹が明日の朝食のためのパンを買いに行ったときに、昨夜のカレーのにおいのする少女と出会う。その後、母を亡くしたあとの一樹がその少女と再会する話。一樹とテツコの物語の始まり。

『昨夜のカレー、明日のパン』は、生と死と再生の物語である。なかなか受け入れることのできなかつた一樹の死を、一樹の生をふり返り、確認することで受け入れていく登場人物たち。主な舞台は、現在テツコとギフが住む、銀杏の木のある家だが、そこは、ただ眠ったり食べたりするための場所ではなく、住んできた人たちが何年もかけて暮らしをつくり続けて来た場所だった。また、タイトルにあるカレーやパンの他にも、たくさん登場する食べ物や飲み物も印象的である。ビール、コーヒー、焼酎、凍頂烏龍茶、焼きそば、サクラモンブラン、ロールキャベツのおでんなど、さまざまなものが登場する。きっと、ドラマ化された際は、画面の中で映えるのだろうと思う。

(東中学校 齊藤正一)

8.



ドナルド・フェイゲン ヒップの極意 初の自伝的エッセイ集。 奥田祐士 訳

スティリー・ダンやソロ作品の、文学的な歌詞と複雑なアレンジで高い評価を得てきたフェイゲンは、本書で、独自の声を持つ、洗練された書き手でもあることを、みずからの筆で証明した。

ヒップの極意 (EMINENT HIPSTERS)

ドナルド・フェイゲン (著), 奥田 祐士 (訳)

この本は、私が敬愛する音楽家の初の自伝的エッセイです。こういう類いの本は、比較的読みやすいはずなのですが、このエッセイはとても難解でした。ただし、音楽に向けた少年のような情熱と、音楽家としての非日常的な精神状態の混乱さが、シニカルな文体で描写されている点は興味深かったです。 ニューヨ

ークの最先端のレコーディング技術を駆使してきた彼が「現代の芸術、文学、音楽、映画、テレビ、兇悪な小型電話、金儲けの話、不動産の話・・・大半は心底げんがりさせる。最初はとても魅力的に映ったインターネットも、TV以上にタチが悪いものへと変化しているように思えるが、これはもう様子を見るしかない」と語っている言葉に、「ヒップスター」として社会とのある種、独特の距離感を感じます。その距離感とは「周縁的な素材をクリエイティブに活用したり、たまたま常軌を逸した空間に暮らしているおかげで、じゅうぶんな距離からなんらかの事実が見えてくる」感覚なのでしょう。(仁礼小 西原秀明)

森上小学校 塚田久美子

9.

「はるか遠く、彼方の君へ」

安澄 加奈 ポプラ社

主人公は、無気力な高校生の男の子。お話の舞台は、現代から源平の戦いの平安時代末期にいきなりタイムスリップする。タイムスリップした先で、源義経に助けられ、拾われる。同じ時代にタイムスリップした他の高校生2人と、自分たちがタイムスリップしたわけと、どうしたらもとの世界に戻れるかを探りはじめる。自分たちの価値観と800年前の時代の価値観の違いを思い知らされる。幸せとは何なのか。人の命とは、何なのか。タイムスリップの原因になった「三種の神器」を集めながら、歴史の流れを変えないように必死になる。その戦いの中、高校生3人それぞれが自分の過去と向き合いながら、成長していくところがとてもすがすがしい物語である。

対象としては、中学生、高校生向けのヤングアダルト図書であるので、中学校の図書館にあるといいと思う。長めの本なので、短めのポップがついていると手にとって読んでくれそうである。

作者は、長野県安曇野市の出身である。今後の活躍も期待したいと思った。

文学同好会 本の紹介

紹介者 森上小学校 堀川 博光

○紹介する本 「和顔愛語を生きる」

○著者 半田孝順 北沢房子（聞き書き）

○出版社 信濃毎日新聞社

○内容紹介

上田・別所温泉の常楽寺住職から天台宗の頂点に立ち、全日本仏教会会長も務める天台座主の自伝。「和らいだ顔、いたわりの言葉」の施し＝和顔愛語＝を大切な布施として生きてきた著者が、どんな苦境の時にも笑顔を忘れず「Keep Smiling」とメッセージを送る。自らの生き方を返して、仏教の教えを分かりやすく伝授。また、「勝て勝て」と連日電報を打った千代の富士（現・九重親方）や、「今すぐ戒名をつけてくれ」と所望された棟方志功らとの交友録も微笑ましく著者の人間味がのぞく。96歳でいまなお、比叡山での過酷なお務めを果たし続ける“現役力の秘訣”も興味深い。

○著者について

半田孝淳

1917年、長野県上田市別所温泉生まれ。2007年より第256世天台座主。